

安心の生食

生でも安心の国産淡水養殖サケ・マスたちです。



サクラマス



信州サーモン(長野)



ヤマメ



ヤシオマス(栃木)



ギンヒカリ(群馬)



イワナ



ピワマス(滋賀)



シナノユキマス(長野)



ニジマス(愛知)



絹姫サーモン(愛知)



アマゴ

お問い合わせは

全国養鱒振興協会

〒441-2224 愛知県北設楽郡設楽町豊邦豊詰27
TEL.0536-64-5311(代) FAX.0536-64-5135
E-Mail: zenmasu@tansui.net URL: <http://www.zenmasu.jp/>

全国養鱒技術協議会

※ 全国養鱒技術協議会は全国23都県の公設水産試験研究機関で構成される調査研究組織です

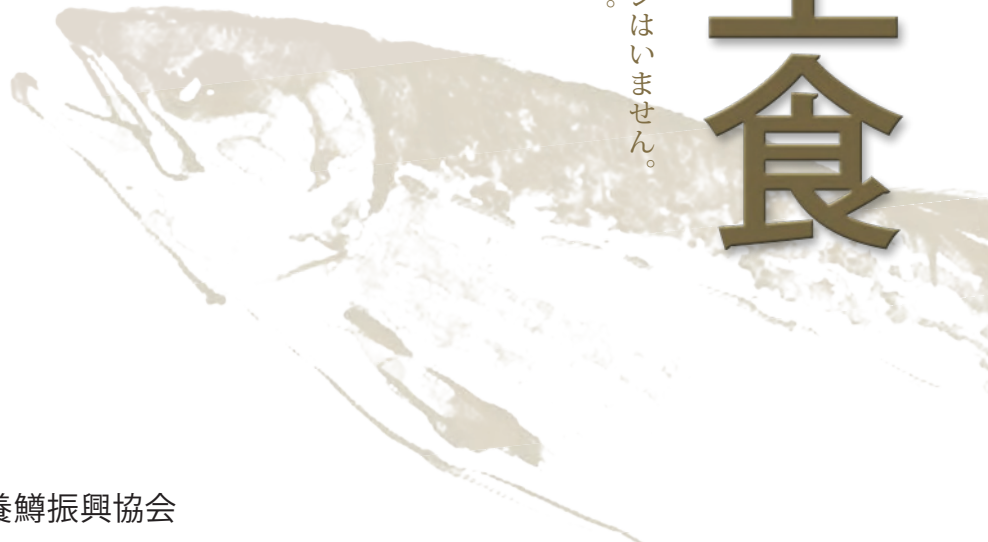
全国内水面漁業協同組合連合会

〒107-0052 東京都港区赤坂1-9-13 三会堂ビル3階
TEL 03-3586-4821 FAX 03-3586-4898
E-mail: zennaigyoren@naisuimen.or.jp URL: <http://www.naisuimen.or.jp/>

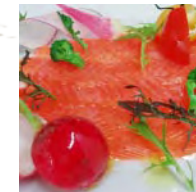
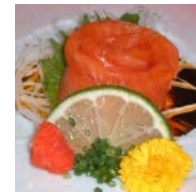
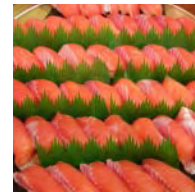


国内の淡水で養殖されたサケ・マス類にはサナダムシはいません。冷凍の必要はなく、生で安心してご賞味いただけます。

安心の生食



全国養鱒振興協会



国産淡水養殖サケ・マス類の生食の安全性、ご存じですか？

公的機関で構成される全国養鱒技術協議会による
国産淡水養殖サケ・マス類の寄生虫実態調査を実施。

実態調査の実施

実施年度	対象地域	対象魚種
1981 1986 1991 1997	28都道府県	ニジマス 6,266尾

実施年度	対象地域	対象魚種
2007 2008	15県	ニジマス、イワナ ヤマメ、サクラマス アマゴ、ビワマス 他、地域ブランド魚 計11魚種 2,187尾

その結果……

国産淡水養殖サケ・マス類からは
まったく認められず
生食の『安全性』が立証されました

だから、安心して生食をご賞味ください。

魚種・地域・飼育期間・サイズ・
養魚用水の種類(河川水・湧水・地下水)に関わらず
国産淡水養殖サケ・マス類は

SANADAMUSHI FREE

検査方法

- 国際獣疫事務局(OIE)魚疫委員会の「水産動物の疾病診断マニュアル」に基づき試料を収集。
- ふ化後11~60ヶ月の範囲で、刺身として食べられる可能性のあるサイズ(体重25~3,647g)をカバー
- あわせて海から川に産卵帰したさくらます60尾を検査、虫のシストや虫体を丹念に探索を実践。
- 可食部の筋肉すべてについて、国立感染症研究所と同じ方法で日本海裂頭条虫のシストや虫体を丹念に検査。
- 日本海裂頭条虫が寄生している標本を用い、検査技術をマスター。シストや虫体を見つけられることを確認。

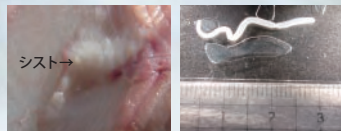
誤解されてきた二つのサナダムシ

◆欧米の“広節裂頭条虫”……淡水域のサナダムシ

◆日本の“日本海裂頭条虫”……海洋域のサナダムシ

そもそもサナダムシとは条虫科や裂頭条虫科の条虫の総称です。一般には欧米で古くから知られている“広節裂頭条虫”を指す記述が多く、この第一中間宿主はケンミジンコですが、第二中間宿主の主体はバイク、パーチなどの淡水魚です。日本ではヒトに寄生しているサナダムシが広節裂頭条虫と同じ形態であるので、長い間サナダムシ=広節裂頭条虫と理解されてきました。そしてサクラマス、サケ、カラフトマスなどに幼虫がいることから、日本ではサケ・マスが第二中間宿主となり、それを食べたヒトが広節裂頭条虫に感染すると言われてきました。

しかし、①日本のサナダムシの卵は淡水中で著しく不活発。②その幼虫を日本の淡水産ケンミジンコ類に実験的に感染させたが、感染したケンミジンコは1種類のみ。③幼虫は海洋生活を経験したサケ属魚類からしか見つからないことから、形態・生理・生化学性状を調べ、日本のサナダムシは欧米の淡水域の“広節裂頭条虫”とは別種で、海洋域の“日本海裂頭条虫”と命名されました。現在では遺伝子解析により判別が可能ですが、つまり、淡水域のみで養殖されたサケ・マス類には“日本海裂頭条虫”の感染はなく、実際に調べても国産淡水養殖サケ・マス類からは発見されませんでした。



日本海裂頭条虫のシスト

日本海裂頭条虫

ふたつの理論

どうして国産の淡水養殖だと大丈夫なの？

日本海裂頭条虫は、海にいる魚、海から川に帰って来た魚に発見される事がありますが、

川のみで生活していた魚から発見されることはありません！

これは日本のサケ・マス類が海で“日本海裂頭条虫”に感染していることを示しており、欧米で見られる淡水域で感染するサナダムシと大きく異なる点です。

また、海産魚を原料とした餌を与えていても、国内のサケ・マス養殖では、加熱や乾燥工程を経て工場生産される配合飼料が使われていますので、

生きたサナダムシが入り込む余地はありません。

